

聖書講筈（裾野キリスト召団ルデヤ会にて）

「十字架上の七言」

――ヨハネ伝第19章ほか――

1991年10月10日

小池辰雄

世界の歴史を両断するところのもの　ひとえにわが為なり　視よ、この人なり　我は罪びとの首なり　神の下、キリストにあつて「わが神、なんぞ我を見棄て給いし」(第一言)「あなたの義が立たないじゃないですか」　「父よ、彼らを赦し給え」(第二言)「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第三言)「なんじの子なり、なんじの母なり」(第四言)「われ渴く」(第五言)「事おわりぬ」(第六言)「父よ、わが霊を御手にゆだね」(第七言)　イエス大声を出して息絶え給う

【ヨハネ19】

「4.ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』⁵ここにイエス茨の冠をかむり、紫色の上衣^{うわぎ}をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』……

²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』

²⁸この後イエス万ずの事の終りたるを知りて――聖書の全うせられん為に――『われ渴く』³⁰と言ひ給う。……

³⁰イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事^{おわ}畢りぬ』遂に首をたれて霊をわたし給う。』(ヨハネ19・4～30)

【マタイ27】

「46……わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし……」(マタイ27・46)

【ルカ23】

「³⁴斯てイエス言いたもう『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』(ルカ23・34)

「⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』(ルカ23・43)

⁴⁶イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言いて息絶えたもう。』(ルカ23・43～46)

【マルコ15】



「³⁷イエス大声を出して息絶え給う。³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。」（マルコ15・37、38）

●世界の歴史を両断するところのもの

今日は十字架の七つの言葉をお話しようと思います。19章の一節一節をここでもってお話するわけではないので、焦点を「十字架上の七言」ということにしてお話する。ことに、このヨハネ福音書の19章には、そのうちの三つが出ています。

キリストは茨の冠を付けられた。こんな事は他にないですね。もう血が流れる。

「ユダヤ人の王、やすかれ」

と、非常に皮肉った侮蔑の言葉を浴びせられる。

キリストというかたは、驚くべきかたで、旧約聖書をもろん若い時からシナゴグで聴かれたわけで、イエスが一番好きだったのは、言うまでもなく、イザヤ書です。

旧約聖書の中から一つを選べと言われたら、私は文句なしにイザヤ書を選びます。イザヤ書66章、聖書66巻です。イザヤ書の中には創世記から黙示録までのことが全部入っている。驚くべき預言書です。ルッターは詩篇が旧約の小聖書だと言いましたが、イザヤ書こそが本当の小聖書だと私は思う。イザヤ書一卷があれば、極端に言うところ、他は要らないというくらいに、預言であり、また預言の成就までも全部このイザヤ書の中に入っている。

特に、キリストの十字架の預言はイザヤ書の53章ですから。まあ、どうしてこんな驚くべき預言があるか、と。ご承知の通り、第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤと、歴史的にはこの三人の人が主になって書いているけれども、これが一貫しているわけですね。

ヨハネ福音書第19章は、正にイザヤ書の53章が背景になっている。しかも、これほどのひどい刑罰にあう。福音書に書いてある通り、およそ出会う人を、本当にキリストに向かってくる人は誰でも本当に救った、病は癒し、死人は甦らせた。まあ、大変なかたです。

世界に宗教がたくさんありますが、また特にキリスト教と仏教は二大宗教と言うけれども、お釈迦さんがどんなに偉くても、キリストとはケタが違う。お釈迦さんは最後に悟って入った。イエスは、もう12歳のイエスをみても、これは本当に文字通り、神の子です。イエスが出なかつたならば、旧約聖書も空しくなる。また、新約の中心は、何といっても、福音書です。

世界の歴史を両断するところのものは、このキリストの十字架です。

「十字架、十字架」

と言うけれども、本当は十字架というものは、我々は軽々しく口にできないことですね。このことはゲーテも言っています。



●ひとえにわが為なり

その十字架は私たちが客観的に「十字架は…」と言えるものではなくて、十字架は我に関わる。我に関わらなかつたら、十字架なんていうものは、およそ語れるものではない。我々が十字架を語るときには、告白にならなければならない。

だから、私はもちろん、

「十字架はこういうものです」

とは絶対に言いません。言えるものではない。

「十字架は、私にとつて、こうである」

と言うしか言えない。

親鸞が、

「弥陀の五劫の思惟はひとえにこれ親鸞のためだけであつた」

と。親鸞が本当に、如来の本願は私のためだけであつたと言つて、あの

「ひとえにわが為なり」

という、のつぴきならない関係に立つたから、親鸞は本当の本願を受けとつた。

我々はまた一人ひとりが、

「福音はただ私のためであつた」

ということが告白できなければ、本当に福音を受けとつていることにはならない。聖書の中心は、何といつても福音書です。その中心は福音書であるということは結局、

「福音書は私ひとりのためであつた」

と、それが本当に告白できるときに、その人は本当に救われていることになる。人との比較ではない。信仰の世界は絶対に、

「神―キリスト―我」

の直線の関係です。この一本の関係が本当に立たなければ、福音は語れない。

私は人の悪口を言うわけじゃないけれども、牧師さんたちが聖書の研究をし、参考書を読み、そして聖書について語っている。いくら「について」語ってもダメなんです。聖書の中から、キリストに降参してそこで告白する言葉でなければ、本当の響きは出てこない。これは何も牧師に限らない。一人ひとりのクリスチャンが、この一点を本当に持つていれば、どこでも本当に告白ができるわけです、恐れなく。ということは、

「私はどれだけ聖書を研究しました」

ということではない。「研究」じゃないですから。

また、人間の数でもない。少数の本ものができる。聖書は本ものを要求しているわけです。いかに本当のクリスチャンが少ないか、キルケゴールが言っているように、

「天才よりも本当のクリスチャンは少ない」

と言つた。ということは、他がみんなダメとは言いません。いろいろ結構ですが、しかし、



のつぴきならない、比較を絶したところの境地に入ると、これは有難いことにもの凄い力が来る。光がくる。その世界が本当の聖霊の世界なんです。

だから、

「十字架と聖霊は離すことができない」

ということは、私はもう散々言ってますけれども、一般のキリスト教会では、その十字架・聖霊の離すことのできない事態がバラバラになつてゐる。だから、我々はどうしても、宗教改革のもう一遍やり直しをしなければならぬ。

「キリスト教」ではない、「キリスト道」の歴史は、そういうようなクリスチャンが断続的に続けているわけです。いわゆる「キリスト教史」ではない。有名無名のそういう人たちが歴史をつないでいる。そういった意味で、集会が大きい小さいのなんていうことは問題でない。

「そこが本ものであれば、そこに天国は開かれている」

ということ、私たちは進んで行こうというわけです。

● 視よ、この人なり

「⁴ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』⁵ここにイエス茨の冠をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』」（ヨ

ハネ19・4〜5）

この、

「視よ、この人なり」

なんです。「この人を視よ」ではない。さっきの讃美歌も「この人を視よ」と歌っていますが、本当は「視よ、この人なり」ということです。ニーチェの『この人を視よ』という本も、あれも本当は『視よ、この人』なんだ。

「ご覧よ、この人だよ」

ということ。「この人を視よ」という言い方は弱い。

「視よ、この人だ。これが歴史上の唯だ独りの人だ」

と。「視よ、この人なり」という、ギリシヤ語の言い方も、ヘブライ語の言い方もそうなっているんですから。私たちは今度は、

「視よ、我なり」

と言えるようにならなければダメです。私はよく集会でもって、

「人間小池なんかを見るな」

とよく言います。けれども、本当は

「視よ、我なり」



ということは言えるですよ、私は。相対的「人間小池」は罪びとに過ぎません。けれども、「私はキリストの証者である」と言う。「視よ、我なり」ということは、

「我こそはキリストの証者である」

ということ。それが本当のクリスチャンの告白であるはずなんです。

「こんなに私はキリストに活かされているんだ。こんなに救われている。死んでも死なない生命がきているんだ」

ということを告白できる。

このあいだ、奈良のK君が、

「小池先生を見ていたら、ある瞬間に、小池先生は雑巾に見えた」

と言った。面白いことを言うなあと思った。

「ああそだよ、私は雑巾だよ」

と。しかしながら、雑巾はものを拭く、きれにする。雑巾がなければ、ものがきれいにならない。私はキリストの雑巾なんだ。人を本当に救にもたらすところの雑巾だ。だから私はあの言葉が面白いから、時々使っている。キリストの雑巾だと。

●我は罪びとの首なり

またパウロは、

「我は罪びとの首なり」^{かしら}

と言った。私は本当に悪い奴だと。ステパノを殺したりしてね。パウロは、しかもキリストに逆らって、散々クリスチャンを捕まえて牢屋に入れて、幾人か殺したかも知れない。

「私は一番悪い野郎だ。罪びとの首だ」

と。罪びとの首パウロが実は、キリストの最大の弟子で、パウロがいなかったら、福音は果たして伝わったかと思えるくらいに、大変な人だ。キリストをのかしては、私は、パウロは世界第一の人物だと思う。どんなに偉いやつがいたって、このパウロにはかなわん。

ということ、本当にキリストに捕まえられて、証している男だね。これだけの患難を通って、そして伝道して、彼は最後まで死なないんだから。コリント後書11章に書いてある。パウロがこれだけの患難にあったと。なぜパウロはそれだけの患難を突破できたか。これはもう本当にキリストの力、聖霊の力です。彼の伝道そのものが、何よりのキリストの証なんです。「罪びとの首」が、実は「救の首」になっている。

それから、内村鑑三がそうです。内村先生というのは、私は正直、聴きましたよ。今生きている人で、内村先生を直接に聴いた人が幾人いるか知らん。私は学生時代に聴いた。内村先生というのは、なかなか圭角——「圭角」というのは角のある人のこと——のある人です。人間的にはなかなかやつかいな男です。だから、

「こんな始末の悪い奴をキリストはお救いになったから、万人は救われるんだ」



と、「万人救済」ということを、あの有名な「戦場ヶ原の会話」というところでもって、

「私は罪びとの首だ、こんな奴が救われたんだから万人は救われるんだ」

と言った。内村先生が罪びとの首。そして、私が第三番目の罪びとの首になった。しかし、「罪びとの首」という表現は、実は比較している表現ではない。どん底の自分を本当に自覚したときに、その言葉が「罪びとの首」という、これが本当に救の境地なんです。

でありますので、もう本当に、あり難くてしょうがない。だから、

「視よ、我なり。わが内なるキリストを視よ」

ということが恐れなく言える。もう私は正直こわいものはないですよ。どんなに政治家がどうであれ、何であろうと、高が知れている。あれはみんな悪いことばかりしている。

●神の下、キリストにあつて

今の日本の民主主義は大間違い。リンカーンがゲチスバーグの戦いのあとで有名な演説をした。三分間演説という、あそこでリンカーンは、

"under God"

「神の下において」

"of the people, by the people, for the people"

「国民の、国民による、国民のための」

政治であると言った。あそこから民主主義的な観念が広まっていったんですが、この、

"under God" 「神の下において」

を日本は取り去ってしまったんだ。

クラークが、

"Boys, be ambitious!"

「青年よ、大望を抱け！」

と言った。あの後に、

"in Christ"

「キリストにあつて」

という言葉があつたはずなんだ。日本では、「in Christ」「キリストにあつて」が抜けてしまつていて。とんでもないです。それでは野心家になってしまう。

"under God, in Christ"

「神の下で、キリストにあつて」

というこの二つの言葉を入れると、素晴らしい言葉になる。我々がそうなんだ。

「キリストにあつて」「in Christ」

はなかなか一般の人には難しいけれども、少なくとも、

「神の下における」「under God」



という――西郷南洲が「敬天愛人」と言ったが――そういう自覚のないのが大方だ。

だから、我々は、このキリストをかく戴いたものは、烈々たる魂で証言していかなければダメなんです。もったいないです、これは。"under God"を忘れているような、こんな日本人はもう滅びたらいいよ。それこそ藤井先生の言葉ではないが、

「日本よ、滅びよ」

だ。内村鑑三、藤井武は天界で嘆きまた怒っているかも知れない。呆^{あき}れているでしょう。

「もう私はこんな国には愛想をつかしたよ」

なんて、内村先生は終りの頃はそんなことを言っただけだからね。

日本の教育がいくらやったってダメ。もつと制度も変えてもらいたいけれども、問題はそこじゃない。教育者自身がひっくり返らなければ、教育者自身が魂に本当に宗教心を持たなかったら、本当の教育はできない。

ダンテでもゲーテでも、あの大詩人たちは本当に神にあつての詩です。ゲーテは聖書をよく読んでいる。

「註解書なんか読んでいられるか」

というわけだ、あのゲーテなんかは。

●「わが神、なんぞ我を見棄て給いし」(第二言)

それでは、ヨハネ伝の19章にもどります。七つの証言で、順序は大体こうであろうと思いますが――まあ、順序はどうでもいいです――マタイ伝の27章の46節に、

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」(マタイ27・46)

とある。この言葉はマルコ伝15章34節にもあります。

「わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給いし」

というこの言葉。この一言がなかったならば、十字架でない。

「これだけあなたに私は従ってきました。あなたの御意を成してきました。私は自分を立てませんでした。御意を私を通してしてくださいと貫いて来たこの私をなぜお棄てになるのか」

ということとは、

「神の義が立たないぞ」

ということです。「神の義」というのは、神の御意を成就すること、成すことが「義」なんです。キリストはこの神の義を、すなわち神の御意を体現した、身体で現じた、これが「義人」ということです。道徳的に義^{ただ}しいなんていうことではない。聖意を完全に成就して、自分を棄ててかかった。これが「義人」で、

「義人なし一人だに無し。キリストだけが義人だ」

とパウロが言ったのは、そのことです。



我々は、そういうように神の聖意ができない。「罪びと」というのはそういうことだ。

「この悪いことを考えた、した」

と、そういうことではない。神に絶対に信従して、信じて、それを身体で行ってきたか、現じていたか。それができたのはイエス・キリストの他にない。だからキリストは、

「何もできない。何も言えない。神様がさしてくれた。神様の言うことを言っただけのなしだ」

と。

「善き先生」

と呼ばれると、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神の他に善いものがあるか」

とおっしゃった。だから、私はキリストのことを

「無者」

と言っているわけです。何者でも無いひと。何ものでも無いひとが本当の義人であった。

「0＝∞」（ゼロ イコール 無限大）

であるというのはいくつかのことです。誰もこのことを言わないんだ。世界中にキリストのことを「無者」なんて言った人は無いでしょう。これは本当だからしょうがない。私はキリストの言葉から、それを集約したんだから。

「無」というのは、「虚無」じゃないですよ。これは、「私が無い」「私心が無い」という世界です。「私が無い」ひとは「神が在る」ひとなんだ。だから、

「我を見し者は、神を見しなり」

とおっしゃった。その「無」の世界に入ったら、もの凄いくことになる。

私たちは自分ではできないから、キリストの十字架が私を無にしてください。

「お前の、過去・現在・未来の人間小池なんていう罪びとは、全部私が引き受けた。

心配要らんぞ」

と。これがキリストの救だからね、あり難くてしょうがない。相対的人間小池なんて、問題にしている。そこで、パウロが、

「我生く、されど我にあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり」

と言ったガラテヤ書2章20節が、正に自分の言葉になる。あのパウロの告白が自分の言葉になった時には、本ものです、それは。

ところが、みんな、パウロのあの言葉は非常に――口では言うよ、口では言うけれども――みんな観念になっている。身に付いていない。本当に身に付けば、聖霊が来るんです。十字架を本当に受けとれば、聖霊が来る。

それが、聖霊がさっぱり来ない。いろいろな本を読んでも、聖霊のことが少ない――少ないというのは、「聖霊」という言葉を言っていないのではないですよ――力が無いから、そ



の文章に本当の力がない。

内村鑑三といえども、素晴らしいんだけど、そのところでは、まだ次元がズレている。でなければ、内村先生はもつと凄かったはずです。みんな「内村先生、内村先生」と言うけれども。私は先生をけなしはしない。先生はもちろん素晴らしいことをなさったけれども、残念ながら、キリストの直弟子の次元からはズレてしまった。

その点で素晴らしいのは、アッシジのフランシスとかザビエルとか、ああいう連中です。あれは本ものです、みんな。

「カトリックだ、プロテスタントだ」

と、そんなことを言っていないんだ、私は。本ものは本ものとする。何だっていいよ。カトリックだって、プロテスタントだって、何だって。人間の側はみんな相対に決まっている。

「ただそこに本ものが現れているか」

ということだけが問題です。

●「あなたの義が立たないじゃないですか」

聖霊の中に入っている人というのは、少ないんだよ、残念ながら。これは体験するまでは仕方がないですよ、聖霊の世界は。説明できない。しかし、問題は何でもない、今日学ぶところの十字架を本当に受けとればいい。

「なんぞ、我を棄て給いし」

というのは、本当に彼は神にこれ従ったのが、

「これが棄てられたら、あなたの義が立たないじゃないですか」

という、そういう叫びですから。「何ぞ我を棄て給いし」というこの言葉が無かったならば、十字架上の言葉は欠けるんです。一番土台の言葉です。

「あなたの義が倒れたら、天下宇宙はどうなりますか」

ということだ。

それは縦の線ですが、後で、今度は横の線が出てきた。

「彼らはみんな私のことは分かってない。だから、私を十字架に懸けた」

と。

「十字架に懸けたのは、彼らが懸けたのではない。私は自分で懸かったんだ」

というんだ、キリストは。

「我、みずから棄つるなり」

と。相対的には彼らが十字架に懸けましたよ。だけれども、絶対の世界では、彼みずから棄てたんだ。なぜ、棄てたか。贖いのためにです。万人の罪の贖いのために、イザヤ書53章を成就するために、キリストは十字架に懸けられた。イザヤ書53章を体現なさった。驚くべきことです。



だから、ユダヤ人には躓きになってしまったわけさ。旧約の律法は破るしき、安息日を破つて、そしていろいろな事をなさつた。「なぜ悪いか」と言うわけだね。ところが、いわゆる律法の奴らは、みんなそれで躓いた。それから、自分を「神の子」と言うものだから、

「神の子なんて、冗談じゃない」

と言って、これも十字架に懸けた。今でも、ユダヤ人は

「キリストは間違っている。パウロは間違っている」

と、相変わらずやっているんだからね、困ったもんだ。頑^{かたく}な民だから。

「彼らの間違いを俺はやってきたので、彼らをひっくり返すためには、キリストに棄てられても」

と、パウロは言った、ロマ書の9章で。

「それほど彼らを救つてやりたいのに、しょうがないじゃないか。歴史の終りに彼らが悔い改めたら、そうしたら歴史は終りになるだろう」

なんて、パウロは言った。このパウロの鮮やかなひっくり返り。キリストと、復活のキリストにひっくり返されたパウロは、何といつても二焦点みたいだな。焦点はキリストだけれどもさ。

●「父よ、彼らを赦し給え」(第二言)

第二言は、ルカ伝23章34節、

「³⁴斯てイエス言いたもう『父よ、彼らを赦^{ゆる}し給え。その為す所を知らざればなり』(ルカ23・34)」

「彼らは私のことはさっぱり分からん。赦してやってください」

と。私はこのキリストの言葉で赦された人です。

「お前を赦してやるぞ」

「有り難うございます」

と、平伏だけです。彼らではない。人間小池はキリストの十字架で赦された。人にどう言われようと、キリストに赦された者は本当の権威を持っている。どう言われたっていいですよ、人には。どう悪口言われようが、迫害されようが、一向に差し支えない。私はキリストに赦されて救われたものだから。そういう人が、十字架の贖いを本当に受けとった人が、本当の権威を戴く。この権威は何事をも恐れない。

私は政治家に一遍言つてやろうと思つてゐるんだ、

「お前たちは聖書を読め」

と。本当に言つてやりたい。この前もいつか言つたでしょ。19世紀の大政治家はグラッドストーンとリンカーンとビスマルクだと。この三人は本当に聖書をよく読んだ。そこから彼らの政治があつた。日本の政治家に在るかというんだ、そういうのが。人物がない。



人物がいけないということは、日本の教育がなっちよらん。また日本のキリスト教がなっちよらん。だから、我々は責任と使命がある。人たちが受けとろうが、受けとるまいが、これは生涯を通して告白していかなければダメです。それは空しくないです、決して。

●「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」（第三言）

第三言は、ルカ伝23章43節、

「⁴³イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕に^{とも}パラダイスに在るべし』」（ルカ23・43）

十字架上の片一方の盜賊は、

「俺は散々悪いことをした。せめても、あなたが天国にいらつしやる時に、救の權威をお持ちになる時に、私を覚えてください」

と言った。もう一方の盜賊は、

「お前は神の子なら我々も十字架から下ろしたらよからう」

なんて、傲慢に言った。この二人の盜賊が、人類を二つに分けている。傲慢な霊はサタンについている。平伏す霊はキリストにつく。だから、片一方の盜賊は救の世界で、キリストに、

「今日、お前は私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。散々悪い事をした片一方の盜賊は最後の瞬間に悔改めたら、キリストと一緒に最初に天国に入ってしまった。これが福音だよな。もう片一方は傲慢だから、これは地獄の方へ落ちてしまった。

人類は、神の前に平伏すか、平伏さないかでもって、二つに分けられる。人間を二つに分けるものは、人種の差別でも何かその人の功績でも何でもない。平伏す魂か、平伏さざる魂か。

西郷南洲はその平伏す方のひと。ヒットラーなんて奴はけしからん奴。今度のフセインという野郎もそうだ。ナポレオンは最後に悔改めたですよ、セントヘレナで。福音書を読み返して驚いた。

「私は参った。福音書は活物^{いきもの}だった。キリストには負けた」

と。ナポレオンはさすがに偉いよ。あれはやつぱり天国に入ってしまった。

ですから、人が偉いの偉くないのと、そんなことは問題でない。本当に神の前に平伏す魂かどうか。それだけです、問題は。

「今日なんじ我と偕にパラダイスなり」

とは、私の大好きな言葉だ。私の墓碑銘はこれにしようかと思っているくらいだ。



●「なんじの子なり、なんじの母なり」（第四言）

四番目はヨハネ伝の19章26節、

「²⁶イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』²⁷また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』（ヨハネ19・26～27）

「このお母さんの面倒をみてやってくれよ。この子供は信頼に価いするから子にしないさい」

と。もちろん、福音的な角度でヨハネを愛されたから、「頼むぞ」と。また、キリストがおっしゃっている通り、

「およそ我が言を為すものは、すべて兄弟であり姉妹であり親子である」

と。もう血統関係をぬけている。我々はお互いに兄弟姉妹だからね。地上の相対的な秩序をこわすんじゃないです。相対的秩序はそのままいいが、天的な間柄というものは、もう地上において兄弟姉妹なんだ。キリストの深い思い遣りですね。

今、親子関係がおかしなことになってしまつて、これが間違つた民主主義からきているわけだ。秩序がない。本当の信愛関係がない。

「何でも自由だ、同じ同格だ」

なんて思つてね、とんでもないよ。これは小学校からの教育が間違つている。小学校の先生をひっくり返さなければダメなんだ、本当は。幼稚園や小学校の教育を間違つたら、もうしょうがない。それから、家のしつけ。お父さん、お母さんの子供に対する躾け。これをしてしっかりやってないとダメなんだ。親が親らしくやってないで、いわゆる民主主義だ何とかだと言つてやってたら、みんなおかしな事になつてしまふ。

私は明治の人間だけれども、まだ昔の方がよっぽと善かつたね、その点で確かに。親や先生を、私たちは絶対と思つて従つていたですから。いわゆる封建的な従いでは、それはいけないけれども、そうでなくて。封建的な威張りはまだ困つたものだ。

だから、もうとにかく困つたもんだよ、日本の教育は。どうにもならない、先生が福音を受けない限り。

「公立では宗教のことは語つてはいかん」

なんてやっているものだから、先生も宗教のことはそちのけにしている。そうじゃないよ。これが、本当の親子関係を、キリストはここでもつて匂わしていらつしやるわけですね。

●「われ渴く」（第五言）

それから、五番目。

「²⁸この後イエス万^{よろ}ずの事の終りたるを知りて——聖書の全うせられん為に——『われ渴く』と言ひ給う。」（ヨハネ19・28）



血が流れた。もう殆ど血がなくなってしまった。

「われ渴く」

「渴いたが、お前たちを本当にこの『われ渴く』でもって満たしているぞ」というわけです。我々はキリストの渴きにおいて、キリストの生命の血を――

「血は即ち生命のあるところなり」

というが――

「わが血を飲め、我が肉を食らえ」

とキリストはヨハネ伝6章のところで言っておられる。「わが血を飲め、わが肉を食らえ」は最後の晩餐でも言われた。血は地に垂れて地が吸ってしまったけれども、このキリストの血の流れは、

『われ渴く』はお前たちを本当に満たさんが為の渴きだぞ」

ということです。

断食ということをやる。本当の断食というのは、食物を断つて、キリストを食べるためなんです。キリストを飲むための断食です。それでなければ、断食して何か修養したと思つたら、そんなことではない。断食はただ堪えるために断食するのではない。キリストを飲み食らうための断食である。その角度から祈っていく。ご飯を食べない時は、そのつもりでキリストを食べたらいい。

●「事おわりぬ」（第六言）

「³⁰イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事^{おわ}りぬ』遂に首をたれて霊をわたし給う。」（ヨハネ19・30）

「この贖罪の事は終つたぞ。ただ一回だ」

と。これはヘブル書にも書いてあるとおり。この贖罪のことは終つた。

「我々もなお救われざる時に」

とパウロが言っているように、キリストは血を流し給うた。贖いのことを成し給うた。

「こと終れり」

と。キリストにおいて、事が終ると、それが本当の始めになる。これは聖霊のことになる。十字架を本当に受けとつたなら、そうすると、始まる。何が始まるかというと、聖霊が始まる。だから、終りと始めは離すことができない。終つておしまいじゃないです、この終りは、「わがこと終りぬ」とは。

●「父よ、わが霊を御手にゆだね」（第七言）

そこで、その次の言葉が、

「⁴⁶イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、わが霊を御手にゆだね』斯く言



いて息絶えたもう。」（ルカ23・46）

これが七番目の言葉になるね。

「お委ねいたします」

と。お委ねしてから、今度はその霊が天界から働きます。また、霊体を着たもうから現れてきた。ルカ伝の終りの方にある。そして、お魚まで食べちゃった。

あれをみんな笑うんだよ、

「お魚を食べるなんてことがあるか」

と言って。私はあるグループにいて、神学者のグループだ、みんな笑ったから、私はそんなグループから出てしまった。この驚くべき現実を笑って、どうするかと。

これは、いわゆる物理の世界ではないですよ。驚くべき次元の事ですから。

「もう参りました！」

と、平伏だけです。「参りました！」と平伏すと、そういう質の世界にこっちが入れられる。奇蹟が起きる起きないじゃない。魂の質がそうなってくる。だから、不思議でしょうがないですよ。

●イエス大声を出して息絶え給う

実は、もう一つある。十字架の七言でなくて、今度は「言」でなくて、「叫び」なんです。これが、マルコ伝の15章37、38節、

「³⁷イエス大声を出して息絶え給う。³⁸聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。」（マルコ15・37、38）

イエスが大声で叫びたもう。そうしたらば、神殿の幕が上から下に切れてしまった。この所です。叫び。この叫びを忘れてはいかん。これはもう異言的な叫びです。もう言葉をなさない。大声で叫びたもう。すると、聖所の幕が切って下ろされた。旧約はお終いということですよ、

「幕が切って下ろされた」

ということ。そうして、

「或る者は甦って出てきた」

なんて書いてある。マタイ伝だったかな。この叫びが、これが凄い。キリストはよく

「叫んだ」

とあるね。ラザロの時も叫びたもうた。

大声で叫ぶという、もう言葉にならない叫び。これは私たちにとっても、

「アーメン！」

でも、

「ハレルヤ！」



でもいいよ。

「キリストさまー！」

でもいいよ、

「主さまー！」

でもいい。とにかく、声は大きな声でなくても、身体の中で――

「沈黙の叫び」

と私は言いたい――沈黙の叫びを持たないと、この福音の世界は、本ものではないとは言わないけれども、沈黙の叫びは、我々の全身的な声なんです。全存在の声なんです。

全存在の声、この叫びが、ビューッと霊波を送って、神殿の幕が切れてしまったんだ。これは本当ですよ。キリストの次元は、普通の考えなんかでもって考えて、

「そんな事があるか？」

なんていうことではないですから。もう、降参して受けとらなければダメです。そうすると、もの凄い光がくる。もの凄い力がくる。本当ですよ、これは。

だから、私はくたびれない。あり難くてしょうがない。集会をすると、力が来て困る。

「集会の終りにはくたびれた」

なんて、冗談言うなど。逆に力がきちやう。

皆さんも聴いているうちに、力が来ちゃったでしょ。語るも聴くも同じこと、キリストの力に入ってしまうからね、光の中に。だから、パウロが、

「福音は言葉に非ず、力なり」

というのは、そのことなんです。

そういうことで、この「叫び」でもっておしまい。ありがとう。

